

「七つの悪霊が入り込む」

2023年06月30日

「汚れた霊は、人から出て行くと、休む場所を求めて水の無い所をうろつくが、見つからない。それで、『出て来た我が家に戻ろう』と言う。帰ってみると、掃除をして、飾り付けがしてあった。そこで、出かけて行き、自分より悪いほかの七つの悪霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。」（ルカ11：24～26）

人間には、心の中か、身体の中かに汚れた霊が宿り、住み着くことがある。ある汚れた霊が住み着いていたところから出て、休む場所を求めた。悪に誘うことに忙しく、人間の体の中では休息が取れないらしい。ユダヤ人は水で清めることを常としていた。汚れた霊は、汚れを清める水の無い所をうろつき、休み場所を探したが、見つからなかったため、出て来た所に戻ろうと思った。住み着いていた所に帰ってみると、そこは、掃除がしてあり、飾り付けもしてあって、いかにも住み心地が良いようになっていた。清める水もなかった。そこで、汚れた霊は、自分より更に悪い、他の七つの霊を引き連れて来て、中に住み着いた。聖書では、七という数字は完全を意味する信仰的な数字である。七つの悪霊を連れて来たのであるから、完全に悪霊に支配されてしまった。そうすると、汚れた霊につかれた人は、前よりもひどく悪い状態になった。何と恐ろしい怖い話ではないか。

汚れた霊・悪霊は、地上にあるものを神のような存在として、心と体の全てを支配するような形で住み着く。掃除がしてあり、飾り付けがして、住み心地が良いような所に侵入してくる。人間は悪霊が侵入しやすい状況を作り出すということである。それは、おそらく二つの状況である。一つは、欲望に駆りてられる時である。神は天地を創造し、最後に男と女を創造された。二人はエデンの園で満たされていた。しかし、神は男に、園のどの木からでも食べてよいが、善悪の知識の木からは取って食べてはならない、食べると必ず死ぬと厳命された。女は男から厳命を聞かされていたが、善悪の知識の木の実を見ると、食べるに良く、目に美しく、また、賢くなるのには好ましく見えたので、取って食べた。悪霊は欲望をそそり、その欲望に宿り、住み着く。権力、財力が全てであると錯覚し、虜になる。悪霊が侵入する一つの状況で、人間はこの欲望から、自由になれず、悪霊に住み着かれてしまう。日頃、見聞きしている通りである。もう一つの状況は対極にある、自分を肯定する声を聞けず、自己否定の暗闇に引きずり落される時である。生かされる場所を見出せず、希望を失い、自虐に落ち込む。その時、回りは色を失い、世界は灰色に見える。このような時、悪霊は住み着き、更なる、自滅へと誘う。主イエスが、悪霊を追放した例は、この状況が多い。彼・彼女らは、政治的、経済的、肉体的に追い込まれ、居場所を失い、暗黒の中に沈みこんでいる。そして、それが世界だと思い込み、抜け出ることができない。悪霊が誘い込んだ罠である。主イエスは、彼・彼女らに対し、神の祝福、生の是認を宣言された。そのまま、生きてよいとの、全き「然り」を告知された。

人はあらゆる欲望に走るか、自虐的な滅亡の二ヒルに酔い痴れるか。その世界こそが全てであると錯覚する所に、悪霊の突き入る状況がある。人間の世界には絶対はなく、全てが相対的で、神のみが絶対である。この方を信じ、心に受け入れ、身を委ねるところに悪霊から解放され、神と共に生きる幸いがある。これが、主イエスがもたらした「絶対的生の是認」という福音である。パウロは、この福音を「キリストの霊を宿す」と言っている。